

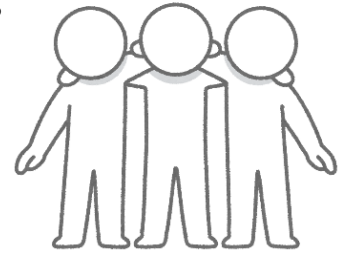


学校だより

「これからの10年」で目指すこと ~学校だより6号(11月)に続けて

校長 佐藤 順一

先月の10周年記念式典では「中学生は可能性のかたまり、なれる自分から
なりたい自分へと一人一人のウェルビーイング実現」について話しました。
今回はその実現に向けて具体的にどのような力を身に付ければよいのか
について一緒に考えていきたいと思います。それは以下の4つの力です。



- 1 関わる力** いろいろな人とうまくやっていく力です。例えば、クラスメイトと協力して行事を成功させたり、部活動でチームワークを発揮したりすることが含まれます。社会や学校でのルールやマナーを守り、礼儀作法やコミュニケーション力を身に付け、友達や先生、家族など、周りの人と良い関係を築くことが大切です。
- 2 見つめる力** 自分をよく知り、自分の力を磨いていく力です。例えば、学校での学習面や行動面において自分を振り返り、本来どのようにするべきか、どのようにしたかったのかを自分に問いかけることが求められます。また、時間や行動を管理して前向きに何事も捉えていくことが大切です。時には耐える(がまんする)力や自分を律する(コントロールする)力も必要です。
- 3 乗り越える力** 課題を見つけ、解決していく力です。例えば、授業や行事で予期せぬトラブルが発生したときに、冷静に対処し、友達と協力して解決策を考えることが重要です。問題が起きたときに、どうすれば良いかを考え、行動に移す力が求められます。
- 4 見通す力** 自分の将来のキャリアを計画する力です。例えば、将来になりたい職業について調べ、そのためにどのような勉強が必要かを考えるだけでなく、普段の生活で「何をしなければならぬか」を考えて行動することが含まれます。職業体験や上級学校の説明会や体験入学等に参加して、自分の興味や適性を確認することに加え、日々の行動がどのような影響があるか先読みする習慣をつけることも大切です。

この4つの力は、社会で活躍するために必要だと多くの大人が感じている力です。これらの力を身に付けることで、皆さんの学校生活はきっとより楽しくなるでしょう。そして自分らしく輝くことができるようになります。日々の学校生活の中で、少しずつ意識してみましょ。 (12月2日全校朝礼より)

吾孺立花中学校トピックス 吾立の窓

1年生の窓

校内ハローワークでは、講師の先生の話をしっかりと集中して聴こうとする姿勢が印象的でした。一生懸命にメモを取り、質問し、講座の内容をしおりにまとめています。

事後学習では、講師の方々へお礼状を書きました。また、学んだことをスライドにまとめて班ごとに発表するプレゼンテーションに取り組んでいます。先日行われたクラス内での発表では、自分が担当したスライドについて覚えて発表する生徒が多く、スライドの作り方にも様々な工夫が見られました。どの班も、どうしたらよりよく伝わるか試行錯誤し、原稿を作って練習した成果を感じる内容となっていました。24日には、クラス代表の班が体育館で発表する会を予定しています。

2年生の窓

今年もあとわずかで終わろうとしています。年を明けるといよいよ最終学年に進級する年となります。進路に向けて襟を正して向き合わなくてはならない時です。学年でも進路指導を重ねてきましたが、ぜひご家庭でも来年1年間の過ごし方を今年1年間の振り返りと共に、話し合ってみる機会を作ってください。

行事では、先日スキー移動教室の説明会をさせていただいた通り、安全安心な移動教室を実施したいと考えています。ものごとは準備が整えば、「ほとんど成功だ」と言われているように、移動教室の場合は、行く前からの「体調管理」がとても大切になってきます。

ぜひすてきな思い出をつくるためにもご家族でお気をつけくださると幸いです。

3年生の窓

11月24日(日)に、都立橘高等学校で「ESAT-JYEAR3」を受験しました。これまで培ってきた英語のスピーキング力を測るだけでなく、都立入試の総合得点にも加えられる重要なテストでした。当日は自宅から直接受験に向かいましたが、緊張感をもって臨み、無事全員受験を終えることができました。保護者の方には受験の申込段階から多大なご協力をいただきました。ありがとうございました。また、12月の三者面談では最終的な志望校を決め、いよいよ出願準備に入っています。入試までの時間は限られています。進路決定に向けて、計画的に、粘り強く頑張りたいと思います。3学年の生徒全員が進路を達成するまで、全力で応援していきたいと思っています。

令和6年度作品展の様子

日頃の生徒たちの学習成果を作品として発表する作品展です。実行委員の生徒が、各展示の見所や工夫などを説明しながら、それぞれの展示会場を回りました。

普段なかなか見ることのできない友だちや先輩後輩の作品を見ながら、感嘆の声をあげる様子が、とても微笑ましいものでした。

